理論言語学の現代的課題（Current Issues in Theoretical Linguistics）

リレー講義のご案内

一般財団法人ラボ国際交流センター
東京言語研究所

2023 年度より、理論言語学講座の新たな開講形態として「リレー講義」を開始しました。リレー講義では、今後の言語研究にとって重要な視点や論点を提供することを目指して、その先進性によって、これまで開講されている理論言語学講座の通常講座や集中講義枠に収まりきらないような多様な研究領域におけるトピックを議論します。同時に、入門レベルの講義を終えた受講者にとっての先端的研究への橋渡し役を担うこともくろまれています。2023 年度の「言語間変異」に続き、2025 年度は「省略現象」を取り上げます。

日時:	7月26日（土）、27日（日）
	11：00～17：00 ※途中休憩あり
講義形態:	ZOOM によるオンライン講義
受講料:	一般 15,000 円（税込）
	2025 理論言語学講座受講生 12,000 円（税込）
	※1 日単位での申込受付は行っておりません
申込期間:	6 月 20 日（金）10：00～7 月 22 日（火）10：00
申込:	お申込みはこちらから

スケジュール:

7 月 26 日（土）

①11:00～12:40　大津由紀雄（慶應義塾大学名誉教授）
講義の趣旨説明
杉崎鉱司（関西学院大学教授）
「省略現象から探るインターフェイスの様相」に関する導入的概説

②13;20～15:00　奥聡（北海道大学教授）
サブセットコピー原理：削除の非同一性における非対称性をめぐって

③15:20～17:00　阿部潤（元東北学院大学教授）
Sluicing 構文に関わる理論的課題と in-situ 分析の妥当性

7 月 27 日（日）

①11:00～12:40　瀧田健介（同志社大学教授）
省略部とその先行詞の間の同一性にまつわる諸問題

②13;20～15:00　佐藤陽介（津田塾大学准教授）
省略における『遊び』はどこまで可能なのか？
インターフェイス方略に課される第 3 要因の観点から

③15:20～17:00　杉崎鉱司（関西学院大学教授）
英語と日本語における動詞句削除の獲得とその理論的含意

講義テーマ:

2025 年度テーマ「省略現象から探るインターフェイスの様相」

省略現象は、文中に通常は音形を伴って現れる要素が欠如しているにも関わらず、その部分が一定の意味を持つ現象である。理論研究においては、文構造を扱う部門と音を扱う部門との接続面（「インターフェイス」）の属性、あるいは文構造を扱う部門と意味を扱う部門とのインターフェイスの属性について貴重な知見をもたらす現象として、長きにわたって主要な研究トピックのひとつとしての地位を維持し続けてきた。このような部門間の内的インターフェイス(internal interface)に関する研究に加え、現在のミニマリスト・プログラムの視点に立って外的インターフェイス(external interface)として捉えると、言語現象としての省略現象はインターフェイスにおける要請をどのように反映しているのか、その要請は言語機能に特有のものなのか、それとも第 3 要因のような人間の認知機能の特性によるものなのかという重要な課題への取り組みと位置付けられる。さらに、母語獲得の観点からは、音形を伴わない部分が持ちうる意味を子どもが言語経験から直接推し量ることが困難と考えられるため、その現象には生得的な言語機能が大きく関与している可能性が高く、その属性を明らかにするための研究が数多く行われてきている。このような背景を踏まえ、本リレー講義では、省略現象の研究の主要な成果と課題を概観した上で、講師による最新の研究成果について議論を行い、省略現象に関する研究の包括的な理解を深めることを目指す。

講義概要：

2025 年 7 月 26 日（土）

[1]　　第 1 講義 (11:00 – 12:40)

杉崎　鉱司（関西学院大学）

2025 年度テーマ「省略現象から探るインターフェイスの様相」に関する導入的概説

本リレー講義全体の理論的枠組みを成す生成文法理論の基本的仮説を概観するとともに、主要な省略現象としてどのようなものが存在すると考えられているのか、またそれらの省略現象についてどのような課題が設定され、研究が行われきたのかといった点について解説し、以降の講義の基盤となる知識を提供・確認する。

参考文献：

Hankamer, Jorge, and Ivan Sag. 1976. Deep and Surface Anaphora. *Linguistic Inquiry* 7: 391-428.

Lasnik, Howard, and Kenshi Funakoshi. 2018: Ellipsis in Transformational Grammar. In *The Oxford Handbook of Ellipsis*, eds. Jeroen van Craenenbroeck and Tanja Temmerman, 46-74. New York: Oxford University Press.

Merchant, Jason. 2013. Ellipsis Phenomena. In *The Cambridge Handbook of Generative Syntax*, ed. Marcel den Dikken, 701-745. Cambridge: Cambridge University Press.

Merchant, Jason. 2018. Ellipsis: A Survey of Analytical Approaches. In *The Oxford Handbook of Ellipsis*, eds. Jeroen van Craenenbroeck and Tanja Temmerman, 19-45. New York: Oxford University Press.

高橋　大厚. 2016.「項省略」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介（編）『日本語文法ハンドブック−言語理論と言語獲得の観点から』pp. 228-264.　東京：開拓社.

Yoshida, Masaya, Chizuru Nakao, and Iván Ortega-Santos. 2014. The Syntax of Ellipsis and Related Phenomena. In *The Routledge Handbook of Syntax*, eds. Andrew Carnie, Dan Siddiqi, and Yosuke Sato, 192-213. London: Routledge.

[2]　　第 2 講義 (13:20 – 15:00)

奥　聡　（北海道大学）

「サブセットコピー原理：削除の非同一性における非対称性をめぐって」

削除される要素と先行詞となる要素の間に求められる復元可能性条件（recoverability condition）は「同一性 identity」ではなく「非弁別性 nondistinctness」であることは古くから論じられているが（Chomsky 1965:181）、そこには非対称がある。すなわち削除対象となる要素の素性構成が先行詞となる要素の素性構成のサブセットである場合はよいが、その逆はよくないことが観察されている（Oku 1998 の「サブセットコピー原理」）。本講義では、まず、英語の動詞句削除を例に、束縛条件にかかわるデータを検討し、束縛条件違反の回避のために提案されている Fiengo & May（1994）の vehicle change といった指標にもとづくメカニズムは必要ないこと、関連する事実はサブセットコピー原理を仮定することで説明できることを示す。次に、英語 VP 削除にみられる動詞形態の不一致の非対称性に関しても、サブセットコピー原理が有効であること

を論じる。最後に、日本語の項削除において、格助詞の不一致、さらに特に先行詞に取り立て詞を含む例に関して非対称性を検討し、意味解釈上の一貫性を丁寧に考慮に入れながら（Oku 2016）、サブセットコピー原理がどこまで有効であるか、実例を交えながら検討する。

参考文献：

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Fiengo, Robert and Robert May. 1994. *Indices and Identity*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Oku, Satoshi. 1998. *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective.* Doctoral Dissertation, University of Connecticut.

Oku, Satoshi. 2016. A Note on Ellipsis-Resistant Constituents. *Nanzan Linguistics* 11: 57-70.

[3]　　第 3 講義 (15:20 – 17:00)

阿部　潤（元東北学院大学）

「Sluicing 構文に関わる理論的課題と in-situ 分析の妥当性」

本講義では、英語と日本語の sluicing 構文を取り上げ、この構文に関わる理論的課題を詳らかにした後、Abe (2015)で提案されたいわゆる in-situ 分析がいかにこの課題に対処しうるかを、Abe (2022)の研究成果をも取り入れ、明らかにする。

sluicing 構文における最も興味深い特性は、島効果にある。この構文の典型的な分析では (e.g. She's reading something, but I can't imagine what [*e*].)、 *wh* 移動が適用した後、*wh* 句の後に続く節を削除するのであるが、この分析では、*wh* 移動が適用しているため、島効果を示すことが期待されるが、実際には島効果が見られない (cf. Ross 1969)。この問題を解決するために広く受け入れられているのが、Merchant (2001)が提唱する「削除による修復」(repair by ellipsis)という考え方である。Abe (2015)の in-situ 分析はその代案として、例文に示した sluicing 構文では、*wh* 句(*what*)は文頭に顕在的には移動しておらず、元位置に留まっていると分析するものである。

本講義では、この in-situ 分析を、*wh* 移動が起こらないとされる日本語の sluicing 構文を取り上げることによって、その妥当性を明らかにすることを最大の目的とする。また、この分析の最大の弱点と目される「非構成素削除」(non-constituent deletion)の必要性についても議論する。

参考文献：

Abe, Jun. 2015. *The In-Situ Approach to Sluicing.* Amsterdam: John Benjamins.

Abe, Jun. 2022. Wh-*In Situ Licensing in Questions and Sluicing*. Amsterdam: John Benjamins.

Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence*. Oxford: Oxford University Press.

Ross, John. 1969. Guess who? In *Papers from the Fifth Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, eds. Robert I. Binnick, Alice L. Davison, Georgia M. Green and Jerry L. Morgan, 252-286. Chicago, Illinois: Chicago Linguistic Society, University of Chicago.

2025 年 7 月 27 日（日）

[4]　　第 4 講義 (11:00 – 12:40)

瀧田　健介（同志社大学）

「省略部とその先行詞の間の同一性にまつわる諸問題」

省略現象に関する研究の重要な論点の一つに、「省略される要素は、その先行詞となる要素とどの程度・どのように同一でなければならないのか」というものがある。興味深いことに、この問い自体が、省略現象においては一定の非同一性、つまり省略部-先行詞間の不一致が許されていることをすでに含意している。この問いに関しては、特に近年、節レベルにおいて様々な種類の不一致があるにもかかわらず省略が可能となることが報告されている (Rudin 2019, Anand, Hardt & McCloskey 2023, Landau 2023 など)。本講義の前半では、この問題に関する代表的なデータおよびその分析を概観し、その理論的意義、特にインターフェイスの問題との関連について整理する。本講義の後半では、特に日本語の研究からこの問題にどのような貢献ができるかについて検討する。具体的には、日本語のスルーシングと項省略における省略部-先行詞間の不一致の事例を取り上げ、今後の方向性について議論したい。

以上の内容に基づき、省略部とその先行詞の間の同一性にまつわる諸問題に関しての整理と、日本語の研究からどのような理論的・経験的貢献が可能かについて論じることを目標とする。なお、余裕があれば、理論言語学における様々な仮説・データ・文献などを一元的かつ有機的にデータベース化する試みであり、特に省略現象に注力して現在も開発が進められている GrammarXiv (https://grammarxiv.net/)も活用しながら講義を進める予定である。

参考文献:

Anand, Pranav, Daniel Hardt, James McCloskey. 2023. The Domain of Formal Matching in Sluicing. *Linguistic Inquiry* Early Access 1-21. [doi: https://doi.org/10.1162/ling_a_00495]

Chung, Sandy. 2013. Syntactic identity in sluicing: How much and why. *Linguistic Inquiry* 44: 1-44.

Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence*. Oxford University Press.

Landau, Idan. 2023. Force mismatches in clausal ellipsis. *The Linguistic Review* 40:419-460.

Rudin, Deniz. 2019. Head-based syntactic identity in sluicing. *Linguistic Inquiry* 50: 253-283.

Takita, Kensuke. to appear. On finiteness and modal mismatches under clausal ellipsis in Japanese. To appear in a special issue of *Journal of East Asian Linguistics*. [draft version downloadable from: https://ling.auf.net/lingbuzz/008805]

[5]　　第 5 講義 (13:20 – 15:00)

佐藤　陽介（津田塾大学）

「省略における『遊び』はどこまで可能なのか？インターフェイス方略に課される第 3 要因の観点から

本講義では、先行研究で発見された可能なミスマッチと不可能ミスマッチの例を集中的に検討し、なぜこのような『遊び』が自然言語に認められるのかという問いについて、ミニマリスト・プログラムにおける言語インターフェイスの働きに課される第 3 要因の観点から考える。講義の前半部分では、主に日本語や英語の省略関連のデータをもとに、動詞句削除や（疑似）空所化、先行詞包含スルーシングにおける態や項構造上

のミスマッチ、項省略下における格助詞や「だけ」「ばかり」などの焦点小辞に関するミスマッチの例を取り上げる。この考察から、主要部 X を中心とする統語的構成素の削除には、その X の姉妹関係にある構成素 YP が先行節に統語的・意味的に同一性な YP′を持つという一貫したズレのパターンが同定される。

次に、本講義の後半部分では、いかにして（ほかのありうる形ではなく）このミスマッチパターンが自然言語のインターフェイスで生じているのかという根本的問いについて考える。具体的には、Sato (2023)を土台として、上記のミスマッチパターンは、意味・統語上の同一性の計算領域を生み出す意味インターフェイスと削除を受ける非音声化領域を生み出す音韻インターフェイスを連結する一時的記憶装置の負担を最も少なくするためのインターフェイス方略の最適解の反映であるという提案を行う。この提案が正しければ、自然言語においては音声表示と意味表示にズレがあるほうが計算効率上は望ましいという通常の想定とは異なる帰結が得られる。講義の時間に余裕があれば、この省略のミスマッチ理論のさらなる帰結 – 省略の削除理論とコピー理論の選択、MaxElide 効果に関する研究成果との整合性、E 素性の言語理論からの排除の可能性など – についても考察する。

参考文献:

Chomsky, Noam. 2005. Three Factors in Language Design. *Linguistic Inquiry* 36: 1–22.

Marušić, Franc. 2005. *On Non-simultaneous Phases*. Doctoral dissertation, Stony Brook University.

Merchant, Jason. 2013. Voice and Ellipsis. *Linguistic Inquiry* 44: 77–108.

Sato, Yosuke. 2023. PF-LF Domain Mismatches under Ellipsis and the Non-simultaneous Transfer Hypothesis. In *CLS 58: Proceedings of the Fifty-Eighth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, eds. Lucas Fagen, Sam Gray, Quain, Stephanie Reyes and Irene Tang, 415-426. Chicago, Illinois: Chicago Linguistic Society, University of Chicago.

Sugimoto, Kenji. 2018. An Argument Structure Alternation of Change-of-state Verbs under VP-deletion. *JELS* 35: 145–151.

Takahashi, Daiko. 2006. Apparent Parasitic Gaps and Null Arguments in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 1–35.

Yoshida, Masaya. 2010. “Antecedent-contained” Sluicing. *Linguistic Inquiry* 41: 348−356.

[6]　　第 6 講義 (15:20 – 17:00)

杉崎　鉱司（関西学院大学）

「英語と日本語における動詞句削除の獲得とその理論的含意」

Saito & Murasugi (1990)やLobeck (1995)などによると、英語において動詞句削除を可能としているのは、主語と時制（T）との間の一致関係(agreement)の存在である。英語の獲得において、幼児が否定文を発話する際、三人称単数の主語とともに（助動詞 does）ではなく助動詞 do を用いてしまう誤りが観察されている。動詞句削除に関する上記の条件が生得的な言語機能の属性を反映したものであるならば、動詞句削除を含む文では、三人称単数の主語とともに助動詞 do を用いる誤りが生じないことが期待される。この予測の妥当性について、CHILDES データベースに含まれる英語を母語とする幼児の自然発話コーパスを分析することを通して検証する。

また、上記の動詞句削除に関する条件が正しく、かつ日本語には英語のような主語と時制との間の一致関係が存在しないならば、日本語には英語に観察されるような動詞句削除は存在せず、日本語を獲得中の幼児もその知識を早い段階から身につけていることが期待される。この予測の妥当性について調査した

心理実験の結果についても報告する。

上記の事例研究を通して、母語獲得研究がどのように理論研究とかかわりうるかについて理解を深めることを大きな目的とする。

参考文献:

Guasti, Maria Teresa, and Luigi Rizzi. 2002. Agreement and Tense as Distinct Syntactic Positions: Evidence from Acquisition. In *Functional Structure in DP and IP: The Cartography of Syntactic Structures Volume 1*, ed. Guglielmo Cinque, 167-194. Oxford: Oxford University Press.

Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification.* Oxford: Oxford University Press.

Saito, Mamoru, and Keiko Murasugi. 1990. N'-deletion in Japanese: A Preliminary Study. In *Japanese/Korean Linguistics 1*, ed. Hajime Hoji, 285-301. Stanford, California: CSLI Publications.

Sugisaki, Koji, and Hisao Kurokami. 2017. On the Nature of the Syntactic Condition on Ellipsis Sites: A View from Child English. In *Proceedings of the 41st annual Boston University Conference on Language Development (BUCLD 41)*, eds. Maria LaMendola and Jennifer Scott, 602-614. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.